
その空に虹の橋が架かる時...

時雨咲瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その空に虹の橋が架かる時…

【Nコード】

N4497A

【作者名】

時雨咲瑩

【あらすじ】

神と魔王の間で、戦争が繰り広げられる世の中。ゴミの中から食べ物を掻き集め、イラついた大人達から暴行を受けるのが当たり前であったスラム街での日々。その片隅でいつも少年は蹲っていた。生きる価値は無いのだろうか。だが、僕にはこの治癒の能力がある。僕は世界を救うために生まれてきたのかもしれない…。一匹の三毛猫に導かれ少年は世界を救う旅へと出た。

プロローグ

その戦争は 何故 始まったのだろうか

何故 殺しあわなければならないのだろうか

何故 この運命はこんなにも皮肉なの
だろうか

あの美しい笑顔は 何処へ
消えたのだろうか

某所。

風が哀しげに唸り声を鳴り響かせる。暗闇の中で、影が大きく動き出した。別の影は、ただじっと動く影を見つめている。

「お前は間違っている」

それは、美しく優しい女性の声である。

「世界を滅ぼしたところで、お前は何を手に入れられるか。いやそこには、何も無い。お前が今思っている“幸せ”とは、紛い物にすぎんのだよ」

そう影に言い聞かせ、女性が、その影の傍へと歩み寄った。そして、優しく影の手を取り、それを頬にそっと当てる。非常に 冷たいものを感じる。女性の眸から、一筋の涙が零れ落ちた。
「お前は、これ程までに冷たくなってしまったのか」

その言葉に、影が小刻みに動く。

「皮肉なものよ。　私は知っている。お前の手は、あんなにも温かかったろう。お前は忘れてしまったのか？」

影に問いかけるように呟き、その手を放す。ゆっくりと後ろへと退いた女性は、影の形相を見つめ強く目を瞑った。それは、もはや人ではない。

「……すまないな。私が悪いのだ」

女性は、大きく息を吐いた。

「お前が、リオンを怨む気持ちは解っている。私はお前にとって、憎き命なのだからな。　だが、怨むなら私を怨め。私もリオンを愛したのだ」

咄嗟に、影が女性へと飛び掛った。だが、影は女性の目の前で崩れ落ちる。その影を、女性は哀しみ溢れた眸で見下ろした。

「今のお前では、私を殺れぬ。お前の力は、徐々に封印され始めているのだ。　時期に、お前は無力となり眠りにつく」

女性が、再び大きく息を吐く。

「お前の為なのだ。わかってくれ」

冷たい風が辺りを包み込む。その唸り声は、まるで女性の心の涙のようにも聞こえる。女性は、振り返り影に背を向けると、ゆっくりと歩き始めた。

「お別れだ」

立ち止まり、影を振り向く。

「　今、私の腹の中には二人の赤子が眠っている。そのうちの一人は、エラゴの血を持って生まれてくるであろう。そして、悪魔という異名を持つ」

風が一段と不気味に唸り声を轟かせる。女性の美しく長い髪が、大きく揺れる。女性は、一息ついて静かに目を瞑った。

「母上から聞いたのだ。彼を産み落とすことにより、私の体は弱まり、いずれ命を落とすだろう　と。だが、私はこの子達を愛している。だから、産むことを決意した。堕ちるところまで堕ちてみせ

ようではないか」

女性の眸が、陽に当たり煌びやかに輝く。

「この子達は、別々となり遠くへと飛ばされる。悪魔の子は自然の魔の道へと向かい、もう一人は神の道へと進むだろう。だがいつか、出会う日が来る筈だ。私は、二人が幸せになることを願おう。そしてお前も、本当の“幸せ”を見つけ出してくれると良い」再び、ゆっくりと歩き始める。そして、高くある窓の向こう側の空を見上げ、語りかけるように口を開いた。

「頼んだぞ、神^{リオン}。あの神話のように、この空に人々を結ぶ“虹の橋”を架けてくれ。私は、お前を信じ愛しているのだ」

その空に虹の橋が架かる時

その世界は真実の愛を手に入れる

プロローグ（後書き）

こちらでも連載開始しました。

初めまして、宜しくお願い致します。

この作品は完結までとても長くなるのですが、最後までお付き合いしてくださると嬉しいです。感想等がありましたら、是非聞かせてください。

1話：旅立ちの時…

「まだ歩くの？」

隣で不機嫌そうに呟く声が聞こえる。その声を発した主を見て大きく溜息をついた。そ

の声には答えず、黙って月の澄んだ明るい夜空の下を歩き続ける。

何キロか先に見える明

かりが、イースト国の端の街『アシユビツファイ街』への入り口だろう……。

旅を始めてもう二年か、そう考えてふと故郷を思い浮かべる。故郷と言っても、血の臭

いも混ざった悪臭が漂う薄暗いスラム街である。生まれてすぐに棄てられたのか、気がつ

いたらそこに立っていた。空腹を満たすためにゴミの中から食べられそうなものを掻き集

め、イラついた大人達から暴行を受ける日々が当たり前であった。

両親が誰であるのか、

知ろうと考えたことはない。知ったところで、どうにもならないからである。棄てたことに

復讐する気も、生んでくれたことに感謝する気も、全くない。ただ、古ぼけた記憶の中で、

誰かの泣き声だけが気になっていた。赤ん坊の声に聞こえるが、それが自分の泣き声なの

か、もしくは、自分の兄弟の鳴き声なのか……。ひたすら、その答えを求めて考えていた。

だが、当然わかるわけがなかった……。

そんな日々を終止符が打たれたのは、二年前　旅立ちを決意した日だった。

二年前、十二月。

僕には生まれつき、特別な能力があった。それは、怪我している人や、病に侵されている人々を救う、治癒の能力である。だが、それとは逆に、治癒するのではなく、その痛みを重くすることもできた。そんなわけで、僕は好かれていたり、嫌われていたりした。僕を嫌う人々のほとんどは、街に住む大人達だった。

今日も、スラム街の隅で、僕は一人うずくまっていた。その汚れた小さな体には、無数の傷がつけられている。その傷からは、まだ、赤黒い血が流れている。つい先程まで、イラついた大人達から暴行を受けていたのだった。頭の中で、その大人達が吐いていった言葉が、妙に焼きついて離れない。生きる価値は無い。こんな所で暮らしていればよく言われる言葉であるが、僕はその度に悩んでいたのだった。それでは自分は何のために生まれてきたのだろうか……。だが、その悩みの答えがどう考えても解らない事を、僕はすでに知っていた。それでも、答えを見つけようと無駄な努力ばかりしていた。

数時間そのまま考えて、ようやく立ち上がる。そして、傷ついた足を引きずりながら、ゆっくりと歩き出した。すぐその路地を抜ければ、大きな広場がある。中央のドラム缶と、積み上げられた土管の他には何も無い無人の広場である。僕は

いつも、そこで暮らしていた。

薄暗く狭い路地を歩いて間もなく、広場にたどり着く。そして、雨が降っていることに気づき、積み上げられた土管の中へともぐりこんだ。そこから、中央のドラム缶に視線を

向ける。ドラム缶の上には、一匹の三毛猫が座っていた。このスラム街にも猫は何匹いるが、この三毛猫は初めて見る。迷い猫だろうか……。目を細めて、その猫の様子を窺う。

その視線に気づいたのか、三毛猫が弾みをつけてドラム缶から不格好に飛び降りた。黄色がかった緑色の眸を向け、慎重に窺いながら寄ってくる。平然にしているが、後ろ左足を引きずっているようである。

「怪我、痛そうだね」

目の前で立ち止まった三毛猫を抱き上げて、土管の中へと入れる。そして、答えるはずも無い猫に問いかけた。猫はその手から逃れようと、必死になってもがいていたが、僕は放そうとはしなかった。

「骨折しているみたいだ。君はタフなんだね。かなり痛かったでしょ？」

そう言って、三毛猫をゆっくりと座らせる。そして、不思議そうに見上げる猫の目の前で、両手を重ねて瞳を閉じた。

「ちよつとだけ我慢してね」

そのまま、大きく息を吐く。吐ききると同時に、その重ねた両手から、眩しい緑色の光が射した。その光が、三毛猫の後ろ左足を覆っていく。三毛猫は、

黙ってそれを見つめていた。やがて、その光は消え、僕はゆっくりと目を開いた。そして、三毛猫に小さく笑いかける。

「もう痛くないよ。歩いてごらん」

三毛猫はスツと立ち上がり、今度は小馬鹿にするような顔で見上げてきた。

「まずは、自分の怪我を治したらどう？」

どこからか、小生意気な子供の声が聞こえてくる。誰だろう、と辺りを見回してみるが、人の居る気配は全くない。広場には、僕とこの猫しか居ないようである。空耳だったのだから……。

「そのうち、大量出血で死ぬかもよ？」

再び、どこからか声が聞こえてくる。まさか。僕は、恐る恐る三毛猫を見た。三毛

猫は不機嫌そうに、大きく尻尾を振っている。僕の視線に気がつくのと、小さく鼻で笑って見せた。

「何、その顔？三毛猫が喋るなんて可笑しいって言いたいの？生憎、それは聞き飽きたよ。」

毎回言われているからね。三毛猫が喋るなんて、ロマンチックじゃないじゃん！……ってさ」

三毛猫がすねた表情で、口をパクパクと動かしている。ということとは、この三毛猫が喋ったということか。

「今、君が喋ったの？」

すかさず、三毛猫に問いかける。

「そうだよ。三毛猫で悪かったね」

三毛猫は無愛想にそう答えたが、僕は、興味津々にその猫を抱き上げた。当たり前だが、

喋る猫を見たのは生まれて初めてのことである。喋ったら面白そう、と考えてはいたもの

の、喋るわけが無いと否定し続けてきた。

「喋る猫なんて、始めてみたよ。信じらんない……」

目を輝かせてそう言う僕に、三毛猫は不思議そうに顔をしかめて僕を見た。

「何言つてんだい？猫が喋るなんて当たり前のことだろう??」

今度は、僕が顔をしかめる。

「まさか。このスラム街には、喋る猫なんて一匹もないよ」

「それこそ、信じられないね！喋らない猫こそ滅多に見ないよ。

君も能力者なんだか

ら、それくらい知ってるでしょ?」

能力者。僕を嫌う大人達が、僕のことをそう呼んでいた。おそらく、特別な能力を

持って生まれてきた者のことを、そう呼ぶのだろう。でも、僕は、その呼び名を嫌っていた。

た。能力者という呼び名は、人殺しの意味でもあったから……。

「僕は、能力者なんかじゃないよ……」

大きく首を振って否定する。

「何言ってるんだい？君はさっき、能力を使っていたじゃないか」

「あれは……」

思わず身を引いて下を向く。

「なるほど 嫌いなのか?」

その様子に気づいたのか、三毛猫が、僕の顔を覗き込む。

「え っ?」

「能力者、嫌いなのか?」

三毛猫の言葉に、拳を握って黙り込む。能力者が罪の無い人を殺している姿は、何度も

この目で見てきている。それまで、この能力は誰かを救うためにあるのだと信じていた。

だから、この能力が、人を殺すためにあるのだと知った時は、地獄を見たような感じであった。

「……僕は、この能力を人殺しになんか使いたくない。せつかく、治癒の能力を授かった

んだから、傷ついている多くの人を救いたい」

真っすぐ真剣な眸で、まるで自分に言い聞かせるように強く言う。

三毛猫はそれを聞き、

目を細めて僕を窺ってきた。

「治癒の能力は、使い方を変えれば、人を殺すことだって出来る。

君は、どんな事が

起きてても、人を殺さないと誓えるの？」

「誓える。僕は、人殺しなんかしない。争うことだけが、解決法じゃないから」

「本当に？」

三毛猫の黄色がかった緑色の眸が、僕を見据える。やがて、小さく溜息をついて、ゆっ

くりと土管の外へと出た。いつのまにか、雨は止んでいるようである。

「……君はきっと、生きる価値があるよ。その能力で人を救い

たいのなら、僕についてきな」

「え？」

「僕が、もっとその能力を鍛えてあげる。そうすれば、沢山の人が救えるはずだよ」

三毛猫が立ち止まり、驚いている僕を振り返って見た。小生意気な顔つきだが、黄色が

かった緑色の眸は、真っすぐだった。その眸が、僕に問いかける。

「　　どうする？」

このスラム街から出れば、もっと苦しむだけではないだろうか。目の前で、何人も命が奪われていく。そして、僕もまた、人殺し扱いされるのではないだろうか……。

「風の噂で聞いたんだ。セントラル国のスラム街に、治癒の能力を持った子供がいるってさ。僕は、興味があつたんだ。僕が……いや、世界中が求めている力だから」

多くの人が、僕を求めている。僕は、傷ついてもいい。一人でも、その命が救えるのなら。今までも、そう生きてきた。だから　　。

「もちろん、行くに決まってるよ。僕は、世界中の人を救うために生まれてきたのだから」

*

*

*

「　　ノエル？」

ふと、自分を呼ぶ声に慌てて我に帰る。振り向いて見ると、何メートルか先の方に、黄色

色がかつた緑色の眸をした三毛猫が、しかめ面をして座っていた。慌てて引き返し、三毛猫の前に立つ。

「何ボくとしちゃってんの？ここだよ、今日泊まる宿」

「ああ、ごめん。ありがとう、ミケ」

そう言っつて、三毛猫のミケが目の前の古い宿屋に入っていく。その宿屋を、ノエルはじ

つくりと見上げた。屋根や壁は苔むしていて、所々が剥がれ落ちている。まるで、廃墟化

した建物だ。しかし、金が無いから仕方がない　と、そう深く溜め息をついてから、ノ

エルはゆつくりと宿屋の中へと入った。

宿屋の中は外見と違って、それほど古くはなさそうである。床のホコリや、家具のサビ

なども、ほとんど目立つものはない。おそらく、こまめに掃除をしているのだろう。ロビ

ーの中央奥にある受付を見ると、そこには、髭を生やした大きな男が立っていた。その男

のもとへ行き、部屋の鍵を預かる。その際に、男はミケを怪しそうに覗き込んでいた。

男から預かった鍵で、二階にある部屋の戸を開く。一番にミケが部屋の中へ入っていき、

続けてノエルが入り、戸を静かに閉めた。部屋の中もロビーと同じく、こまめに掃除がし

てあるようである。また、広くもなく狭くもない。人間二人では充分な広さである。ただ、

人間一人に猫一匹では、少し広いように感じられた。とりあえず、荷物を置き、

座り込んで一息つく。

「　明日はどうするの?」

三枚重ねの座布団の上にまるまって、ミケが尋ねる。そのミケを横目で見て、ノエルが

答えた。

「街の見学に行きたいから、ミケは休んでいて良いよ」

「了解。　おやすみ」

「おやすみ」

再び一息ついて、部屋の中を改めて見回す。ベランダがあること

に気づき、ノエルは静

かに窓を開けてベランダに出た。明らかに部屋の中とは違う雰囲気。冷たい風は、新鮮で

ある。空を見上げると、いくつかの小さな星が目に入ったが、然程美しいわけではない。

深く溜息をついて、ネオンが輝いているわけでもない真っ暗な街中を見下ろした。ここに

も『平和』という文字はないのだろうか……。

旅を始めて二年。今まで沢山の所を訪れたが、どこでも戦争は起きていた。ある所では、

その戦争に巻き込まれてしまったこともある。治癒の能力を使っても、目の前で沢山の人が

が死んでいき、仲良くなった友でさえも失ったことがあった。そのせいで、ノエルは心に

深い傷を負っていた。だが逆に、戦争を終わらせよう、という気持ちも湧いてくるのであった。

「あなた、旅人さん？」

突然、隣で少女のような声がする。慌ててその声がした方を見ると、すぐ隣に金髪の少

女が、笑顔でノエルを見つめて立っていた。そして、ついでに、このベランダがどの部屋とも繋がっていることに気がついた。

「あたし、アリス。あなたの名前は？」

「……ノエルです」

アリスが手を差し出し、お互いに握手を交わす。ノエルは、改めてアリスを見た。長い

金髪に、まるで人形のような顔立ちをして、手足は細く色白である。その笑顔には、とて

も愛敬があり、思わずつられて笑顔になってしまっただけである。

「出身はどちら？」

「セントラル国のスラム街です。僕、棄てられたらしくて……」

そう言って、ノエルは後悔した。今までの旅の中でも、同じように答えてしまい、相手に

に氣を使わせてしまったことがあった。窺うように、アリスの顔を見る。

「そう。それはお気の毒ね。アシュビツフィへは初めて？」

アリスは一瞬驚いた表情を見せたが、笑顔に戻してそう問い返した。その反応に、ノエル

も一瞬驚いて目を見開く。それから、黙って大きく頷いて見せた。「それなら、明日あたしが案内してあげる」

ノエルの答えに、アリスが嬉しそうに笑顔でそう言う。

「それは助かります。ありがとうございます、アリスさん」

「どういたしまして」

小さく御礼するノエルに、アリスが笑顔で答える。それから、ベランダの手すりに両手

をかけると、振り向くようにノエルを見た。そして、三メートル程下の地面へと、勢いよ

く跳び降りる。アリスは、何事もなかったかのような表情で、軽やかに着地して見せた。

「アリスさん　！」

思わず息を吞んで、ベランダからアリスを見下ろす。そんなノエルに、アリスは得意げに笑って見せた。

「じゃあ、また明日ね」

「

*

*

*

朝、十時頃、街中の商人達が一斉に活動を始め出す。晴天で気温も程良く、まさに、仕事日和である。

部屋の戸が、ドンドンと鈍い音を鳴らす。アリスが来たのだろうか。読んでいた本を閉

じ、ぐっすりと眠っているミケを起こさないように、静かにその戸を開く。そこには、笑

顔で立っているアリスがいた。

受付の男に部屋の鍵を預け、二人で街へと出る。深夜の街中とは違い、とても明るい雰
囲気である。人々にも愛想があり、旅人であるノエルを見かけると、明るい笑顔で話しかけてきた。気がつくと、ノエルもこの街に和んでしまっていた。

街中の広場に出ると人々は一層賑わい、雑貨や食物を売っている露天商の店がずらりと

並んでいた。よく見ると、ノエルの見たことのない珍しい食物も売られていた。その一つ

一つをじっくりと見ていくと、やがて、片隅にある小さな店の前でノエルは足を止めた。

美しく透き通った丸い何かが、ノエルを惹きつける。その横でアリスは、何故かクスクスと笑っていた。

「お兄さん。これが珍しいのかね？」

露天商の老人が、アリスと同様に、可笑しそうに笑って問いかける。ようやく、アリス

が自分を見て笑っているのだと気づき、ノエルは恥ずかしそうに赤面した。その顔を見て、

アリスが益々苦しそうに笑ってみせる。

「それは、やめといったほうがいいわ」

ノエルの袖を掴んで、アリスが歩き出す。それから、ノエルの耳

元で付け足すように囁いた。

「見た目は綺麗なんだけどね、味は不味いことで有名なの」
賑わう広場を抜けると、まるで別世界のように、まるっきり人気のない町並みへと出た。

しばらく歩いていくと、ふと、案内をするアリスの足が立ち止まった。その見つめる視線

の先には、白く小さな教会がある。どうしたのだろうか。アリスの顔を覗き見る。ア

リスは何故か、懐かしそうな表情をしていた。

「小さい時、ここに住んでいたの」

町並みを歩き出しながら、ようやく、アリスが口を開く。

「正確には、隠れてた　かな」

隠れていたとはどういうことだろう、と首を傾げてアリスを見る。

アリスは、小さく笑

っていたが、どこか哀しそうでもある。

「ノエル君は『虹の大陸』に行ったことある？」

アリスが振り返って問いかける。その表情には、すでに笑顔は消えていた。ノエルは、

大きく首を横に振って見せた。でも、聞き覚えならある。

「それなら、この戦争の始まりは知ってる？」

再び、大きく首を横に振る。今度は、全くって程に知らなかった。

「この戦争は、虹の大陸にある『空白街』から始まったのよ」

一息ついて、アリスが切り出す。

「そこに、特殊な能力を持った二人の少年がいたの。成長していくにつれて、二人は自分

の能力を試してみたいと思うようになった。でも、“狂った政治を立て直し、助けを求めて

いる人を救う”という意見と、“狂った世の中自体を滅ぼそう”という考えに分かれてしま

った。　こうして、前者は『神』と後者は『魔王』と呼ばれ、次第に世の中も二つに分かれ、戦争を繰り広げるようになってしまったの。最初は、能力なんて持っていない人が多かったから、武器を使って戦っていたのだけど、そのうち両方が、人々に能力を授けるようになっていったの。そしたら、能力者が神側と魔王側にわかれてお互いに憎しみをぶつけ合うようになってしまったのよ」

戦争がどうして始まったかなんて、考えたことすらなかった。だが、何故彼等は争って想いを伝え合うのだろうか。

アリスは話しを続ける。

「でも　、一部だけ……　どちら側にもつかない者達が居たの。今はもう、二つに別れてしまったのだけど」

そこまで言って、一息つく。

「それは、兵器^{ウエポン}として科学者が発明した、極めて人工的な存在」「人工的な……存在？」

顔をしかめて、アリスの次の言葉を待つ。だが、アリスは下を向いて、なかなか口を開かなかった。長いこと沈黙が続き、5分ぐらい経ってから、アリスはようやく、ゆっくりと口を開いた。

「　あたしも、その一人」

驚いて大きく息を呑む。そして、信じられないとでもいうように、大きく首を横に振り、

目の前で哀しい眸をしているアリスを見た。

「あたしは、兵器である自分が……人を殺せる自分が、すごく怖かったの。何度も何度も、

本気で死のうと思ったわ。でも、それさえも怖くて出来なかった。

だから、あの教会

に隠れたの。戦争から、逃げてたの！」

アリスの目から涙がこぼれ落ちる。

「どうして……」

それにつられるように、ノエルの目からも、大粒の涙がこぼれ落ちる。

「どうして、戦争はそこまで苦しめるんですか？ どうして？」

ノエルは複雑な気持ちだった。何よりも、その現実にはショックを受けていた。兵器とし

て人の手で造られ、戦争で人を殺さなくてはいけない。きっとアリスは、普通の人間として生まれたかったはずだ。

「……ごめん。なんか暗い話になっちゃったね。 どうかで花茶

しようか。この近くに、
良いお店あるからさ」

沈黙が続いたまま、アリスの後を歩いて間もなく、アンティークな喫茶店にたどり着い

た。入り口の横にある看板に、『ルージュ』と大きく書いてある。

おそらく、それがこの店

の名前だろう。アリスが、ゆっくりと店の戸を開くと、カウンターで葉巻を加えた若い女

が、ノエル達をすぐに出迎えてくれた。アリスと二人でカウンターの席に座ると、若い女

は後ろの棚からティーカップを二つ取り出した。

「 アンタ達、未成年だろ？ 紅茶でいいかい？」

若い女は、アリスとノエルが頷くのを確認すると、フルーツの香りがほんわりと広がる

温かい紅茶を、ノエル達の目の前でティーカップに注いだ。

「コイツが、アリスの言ってた奴か？」

紅茶の入ったティーカップをカウンターに置いて、ノエルを親指で指す。アリスは、笑顔で大きく頷いて見せた。それを見て、若い女がまじまじとノエルを覗き込む。

「なかなかいい男だね。あたしは、エフィー。アリスの保護者だよ」

「あ、どうも。ノエルです」

エフィーが手を差し出したのに気づき、お互いに握手を交わす。保護者ということとは、

アリスが人工的な存在であることは知っているのだろうか、そう考えてエフィーを複雑な表情で見つめ返した。

「旅してるんだって？」

「えっ？あ、はい」

思わず、聞きそびれそうになる。慌てるように、ノエルは答えた。「ごめんなあ、こんな街で。あたしが小さい時は、まだここは戦地じゃなかったんだ

けどさ。今では、毎日のように戦争が起きてるよ。あたしの息子なんて、戦争慣れしちまつてやがる」

エフィーが、カウンターに頬杖をついて深く溜息をつく。そして、何か思いつめた表情を見せた。

「息子さん、いらっしゃるんですか？」

すかさずノエルが問いかける。そのノエルに、エフィーは弱々しく笑いかけた。

「まあね。最近は反抗期で、母親扱いしてくれないけど……」

再びエフィーが深く溜息をつく。

「あ、でも、きっと、色々とエフィーさんに感謝していると思いますよ」

「ありがとう。まあ、感謝されるようなことは、いっぱいしてきたからね。感謝してくれないと困るよなあ」

エフィーが体勢を立て直し、葉巻の火を灰皿に押し当てて消してみせる。それから、ノ

エルとアリスの目の前に、紅茶の入ったティーポットを丁寧に置いた。

「好きに飲みな。あたしは、ちょっと奥行ってるからさ。じゃ

あね、旅人さん」

そう言って、後ろ向きに大きく手を振りながら、エフィーは店の奥へとゆっくりと消えていった。

「優しい人だね、エフィーさんって」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4497a/>

その空に虹の橋が架かる時...

2010年10月9日22時03分発行